



イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」の健康成人における生物学的同等性試験

田中孝典^{1)*} / 平栗貢一²⁾ / 佐々木啓徳²⁾ / 大西明弘^{3)**}

● 要旨

ジェネリック医薬品のイミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」と先発医薬品であるウリトス[®] OD 錠 0.1 mg との生物学的同等性を検証するため、日本人健康成人男性を対象に 2 剤 2 期のクロスオーバー試験を行った。本剤は口腔内崩壊錠であるため、「水で服用する試験」と「水なしで服用する試験」を実施した。

治験薬投与後 12 時間までの血漿中イミダフェナシン濃度より、両製剤の血漿中濃度-時間曲線下面積 (AUC_t) と最高血漿中濃度 (C_{max}) を算出し、バイオアベイラビリティを比較した結果、いずれの試験においても両製剤の AUC_t と C_{max} の対数値の平均値の差の 90% 信頼区間は、log(0.80) ~ log(1.25) の範囲内であった。なお、本治験において有害事象は認められず、被験者の安全性に問題はなかった。

したがって、イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」は、ウリトス[®] OD 錠 0.1 mg と治療学的に同等であると考えられた。

キーワード: イミダフェナシン, ジェネリック医薬品, 生物学的同等性試験, 血漿中濃度, 日本人健康成人男性

はじめに

イミダフェナシンは、ムスカリン性アセチルコリン (ACh) 受容体サブタイプのうち M₃ および M₁ 受容体に高親和性を有する抗コリン薬である。副交感神経刺激による膀胱平滑筋の収縮反応において、M₃ 受容体を介した拮抗作用を示すだけでなく、神経終末において M₁ 受容体を介した ACh 遊離の阻

害をすると考えられている。

イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」は、1 錠中にイミダフェナシンを 0.1 mg 含有する口腔内崩壊錠であり、先発医薬品である、ウリトス[®] OD 錠 0.1 mg (杏林製薬株式会社) と同一の有効成分を同量含有する同一剤型のジェネリック医薬品として沢井製薬株式会社で開発された過活動膀胱治療剤である。

表 1 治験薬

名称	製造販売元	剤形	成分・組成
イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」	沢井製薬株式会社	素錠 (口腔内崩壊錠)	1 錠中、イミダフェナシン 0.1 mg を含有
ウリトス [®] OD 錠 0.1 mg	杏林製薬株式会社		

1) 医療法人相生会 にしくまもと病院 2) 沢井製薬株式会社 開発部 3) 東京慈恵会医科大学 臨床検査医学

*: 治験責任医師 **: 医学専門家

責任著者連絡先: 沢井製薬株式会社 開発部 佐々木啓徳 (〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 5-2-30)

表2 治験デザイン

試験	被験者数	第I期	休薬期間	第II期
水で服用する試験	12	ウリトス [®] OD錠0.1mg	7日間	イミダフェナシンOD錠0.1mg「サワイ」
	12	イミダフェナシンOD錠0.1mg「サワイ」		ウリトス [®] OD錠0.1mg
水なしで服用する試験	12	ウリトス [®] OD錠0.1mg	7日間	イミダフェナシンOD錠0.1mg「サワイ」
	12	イミダフェナシンOD錠0.1mg「サワイ」		ウリトス [®] OD錠0.1mg

今回、イミダフェナシンOD錠0.1mg「サワイ」とウリトス[®]OD錠0.1mgの治療学的同等性を保証するため、「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」¹⁾に従って、生物学的同等性試験を実施した。本剤は口腔内崩壊錠であるため、「水で服用する試験」と「水なしで服用する試験」を行った。

I. 対象と方法

本治験は「医薬品の臨床試験の実施の基準」(GCP)に則り、治験審査委員会で承認を得た治験実施計画書を遵守して、水で服用する試験は2018年10月から同年11月、水なしで服用する試験は2018年10月に、医療法人相生会 にしくまもと病院にて実施された。

1. 治験薬

本治験に使用した治験薬の詳細を表1に示した。

2. 被験者

本治験では、20歳以上45歳未満の日本人健康成人男性を対象とした。

治験薬投与前4週間以内に事前検診を行い、薬物に対するアレルギーや、薬物の代謝・排泄に影響を及ぼすと思われる疾患・手術歴のない志願者の中から、治験責任医師が治験参加に適格と判断した者を被験者として選択した。なお、これらの被験者には、あらかじめ治験の目的、試験方法、予想される危険性等を十分に説明し、文書による同意を得た。

3. 治験デザインおよび投与方法

治験デザインは2剤2期のクロスオーバー法とし、被験者24名を1群12名の2群に無作為に割り付けた。休薬期間は7日間とした(表2)。

治験薬投与前の諸検査で健康状態に問題がないと判断された被験者に対し、10時間以上の絶食下、治験薬1錠を投与した。水で服用する試験では両製剤を水150mLとともに服用させた。水なしで服用する試験では両製剤を水なしで唾液とともに服用さ

せた。なお、治験薬投与前1時間と投与後2時間は絶飲とし、投与後4時間は絶食とした。

4. 被験者の管理

治験期間中は、治験薬以外の薬剤の使用を禁止し、飲食物・嗜好品の摂取や姿勢および行動・運動等を制限した。各期の治験薬投与前日(入院日)から投与後24時間(退院日)の諸検査終了時までには、被験者を実施医療機関に入院させて管理した。入院期間中の食事は、各期同一の献立とした。

5. 観察検査項目・時期

治験スケジュール表(表3)に従い、各観察検査(表4)を実施した。観察検査項目および検査時期は、各期同一とした。治験期間中に発現した自覚症状・他覚所見については、随時、治験責任医師または治験分担医師が確認することとした。

6. 血漿中薬物濃度の測定

治験薬投与前、投与後0.25, 0.5, 0.75, 1, 1.5, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 12時間(合計13時点)の血漿中イミダフェナシン濃度をLC/MS法で測定した。

7. 統計解析

治験薬投与後12時間までの血漿中濃度-時間曲線下面積(AUC_t)と最高血漿中濃度(C_{max})を生物学的同等性評価のパラメータとし、対数値の平均値の差の90%信頼区間を算出した。また、参考パラメータとしてAUC_∞, MRT, kel, t_{max}について分散分析を行い、両製剤の分散比を有意水準5%で検定した。統計解析にはBESTS(株式会社CACクロア))を用いた。

8. 生物学的同等性の評価

「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」の判定基準(表5)に従い、両製剤のAUC_tおよびC_{max}の対数値の平均値の差の90%信頼区間がそれぞれlog(0.80)~log(1.25)の範囲内にあるとき、両製剤は生物学的に同等であると判定することとした。

表3 治験スケジュール表 (水で服用する試験, 水なしで服用する試験 共通)

試験日	時刻	経過時間 (hr)	治験薬投与	薬物動態用採血	自覚症状・他覚所見	医師の診察	身体所見	血圧・脈拍数・体温	12誘導心電図	臨床検査	食事
同 意 取 得											
事前検診	—	—				○	○	○	○	○	
入院日 (入院1日目)	16:00	入 院									
	19:00	—									○
投与日 (入院2日目)	7:00	—		○		○		○	○	○	
	9:00	0	○		↑						
	9:15	0.25		○	↑						
	9:30	0.5		○	↑						
	9:45	0.75		○	↑						
	10:00	1		○	↑						
	10:30	1.5		○	↑						
	11:00	2		○	↑						
	12:00	3		○	↑						
	13:00	4		○	↑	○		○	○		○
	14:00	5		○	↑						
	15:00	6		○	↑						
	17:00	8		○	↑						
	19:00	—									○
21:00	12		○	↓							
退院日 (入院3日目)	9:00	24			↓	○		○	○	○	
	—	退 院									

表4 観察検査項目

診察	医師の診察
身体所見*	身長, 体重, BMI
生理学的検査	血圧, 脈拍数, 体温, 12誘導心電図
血液学的検査	白血球数, 赤血球数, ヘモグロビン量, ヘマトクリット値, 血小板数, 白血球分類 (好中球, リンパ球, 単球, 好酸球, 好塩基球)
血液生化学的検査	総蛋白, アルブミン, AST, ALT, LD, 総ビリルビン, 直接ビリルビン, ALP, γ -GT, 尿素窒素, クレアチニン, 尿酸, ナトリウム, クロール, カリウム, 総コレステロール, 中性脂肪, 血糖
尿検査	比重, pH, 糖, 蛋白, 潜血, ケトン体, ビリルビン, ウロビリノーゲン
免疫学的検査*	RPR法, 梅毒TP抗体, HBs抗原, HCV抗体, HIV抗原・抗体
尿中薬物検査*	フェンシクリジン類, ベンゾジアゼピン類, コカイン系麻薬, 覚せい剤, 大麻, モルヒネ系麻薬, バルビツール酸類, 三環系抗うつ剤

*: 事前検診のみで実施した

表5 生物学的同等性の判定基準

試験製剤と標準製剤の生物学的同等性評価パラメータの対数値の平均値の差の90%信頼区間が $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲にあるとき、試験製剤と標準製剤は生物学的に同等と判定する。なお、上記の判定基準に適合しない場合でも、試験製剤と標準製剤の生物学的同等性評価パラメータの対数値の平均値の差が $\log(0.90) \sim \log(1.11)$ であり、かつ、ガイドラインに定める溶出試験で溶出挙動が類似していると判定された場合には、生物学的に同等と判定する。ただし、この規定が適用されるのは、被験者数20名(1群10名)以上で実施された場合に限られる。

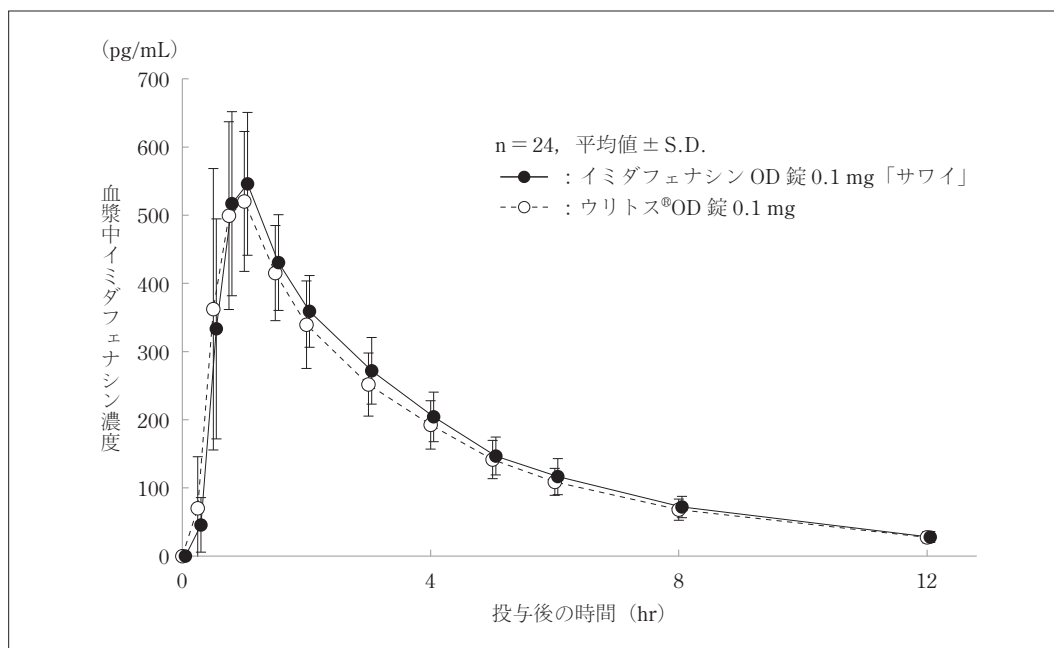


図1 水で服用する試験の血漿中イミダフェナシン濃度

9. 安全性の評価

治験薬投与後に自覚症状・他覚所見が認められた場合や、生理学的検査、臨床検査において異常が認められた場合は有害事象とし、程度および治験薬との関連性(明らかに関連あり、おそらく関連あり、関連あるかもしれない、関連なし)を判定することとした。

II. 結果

1. 水で服用する試験

1) 対象被験者

被験者24例を薬物動態および安全性の評価対象とした。被験者の年齢は20～44歳(平均23.5歳)、体重は50.0～74.7 kg(平均63.1 kg)、BMIは18.6～24.9(平均21.3)であった。

2) 血漿中薬物濃度

平均血漿中濃度推移を図1、各被験者の血漿中濃

度推移を図2、薬物動態パラメータおよび参考パラメータの分散分析結果を表6に示した。血漿中イミダフェナシン濃度は製剤間で類似した推移を示し、いずれのパラメータでも有意差は認められなかった。

3) 生物学的同等性

血漿中イミダフェナシン濃度より求めた AUC_t および C_{max} の対数値の平均値の差の90%信頼区間は、 $\log(0.99) \sim \log(1.10)$ および $\log(0.94) \sim \log(1.10)$ であり、いずれも $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内であった。したがって、イミダフェナシン OD錠0.1 mg「サワイ」とウリトス® OD錠0.1 mg は、水で服用する試験において生物学的に同等であると判定された(表7)。

4) 安全性

本治験において、有害事象は認められなかった。

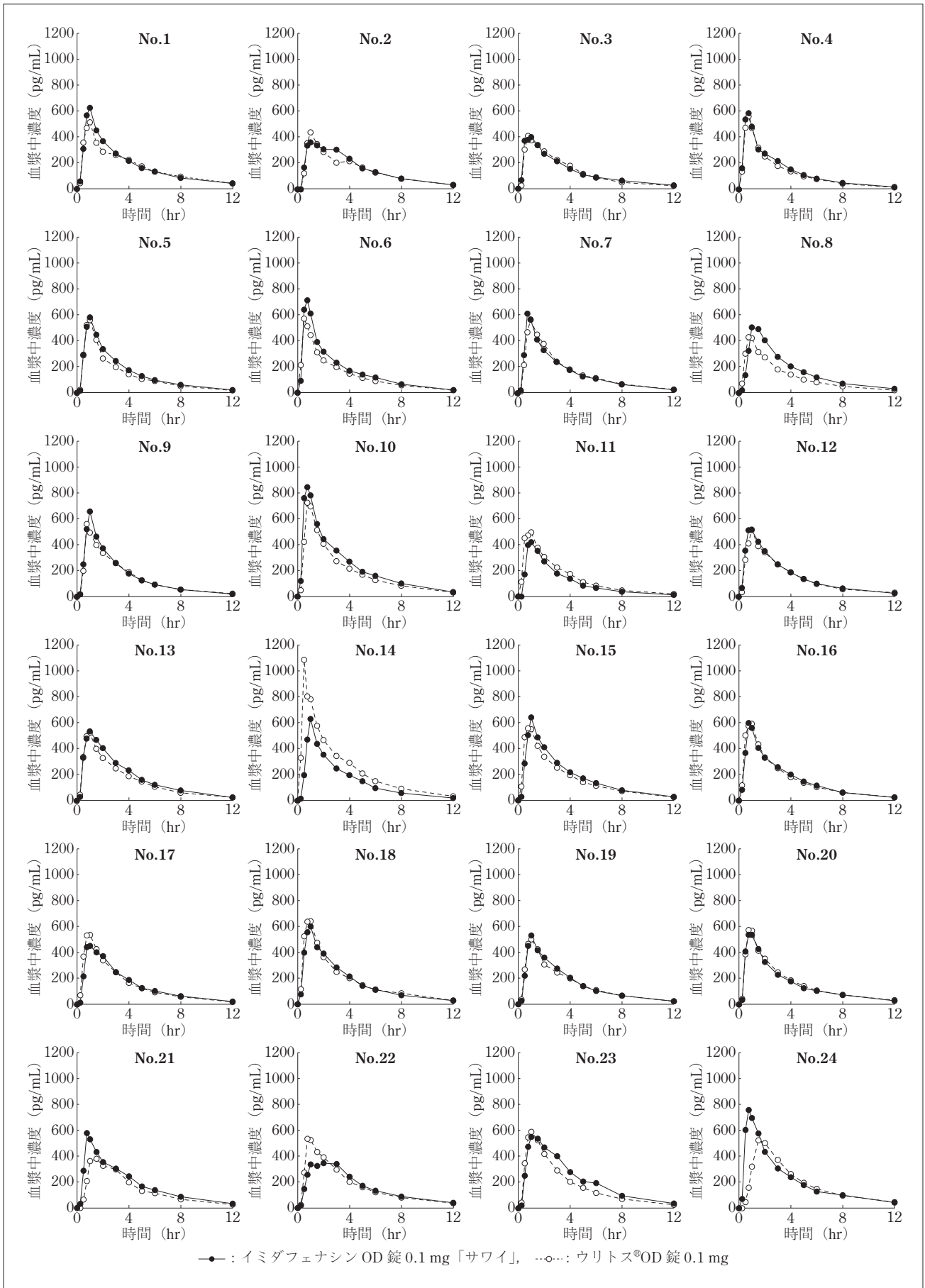


図2 水で服用する試験の各被験者の血漿中イミダフェナシン濃度

表6 水で服用する試験の薬物動態パラメータ (n=24, 平均値±S.D.)

	AUC _t (pg・hr/mL)	AUC _∞ (pg・hr/mL)	Cmax (pg/mL)	tmax (hr)	kel (hr ⁻¹)	T _{1/2} (hr)	MRT (hr)	AUC _t /AUC _∞ (%)
イミダフェナシンOD錠 0.1 mg 「サワイ」	1982.7 ± 312.1	2103.6 ± 340.2	565.6 ± 118.7	0.96 ± 0.25	0.240 ± 0.027	2.92 ± 0.35	3.53 ± 0.24	94.3 ± 1.8
ウリトス®OD錠 0.1 mg	1898.4 ± 310.3	2021.2 ± 338.4	557.6 ± 134.0	0.92 ± 0.24	0.233 ± 0.026	3.01 ± 0.36	3.51 ± 0.27	94.0 ± 1.9
分散分析結果*	—	p=0.2261	—	p=0.6047	p=0.0820	—	p=0.5100	—

* : p<0.05 で有意差あり

表7 水で服用する試験の生物学的同等性解析結果

	AUC _t	Cmax
対数値の平均値の差の90%信頼区間*	log(0.99)~log(1.10)	log(0.94)~log(1.10)
対数値の平均値の差	log(1.04)	log(1.01)

* : log(0.80)~log(1.25) の範囲にあるとき、生物学的に同等と判定する

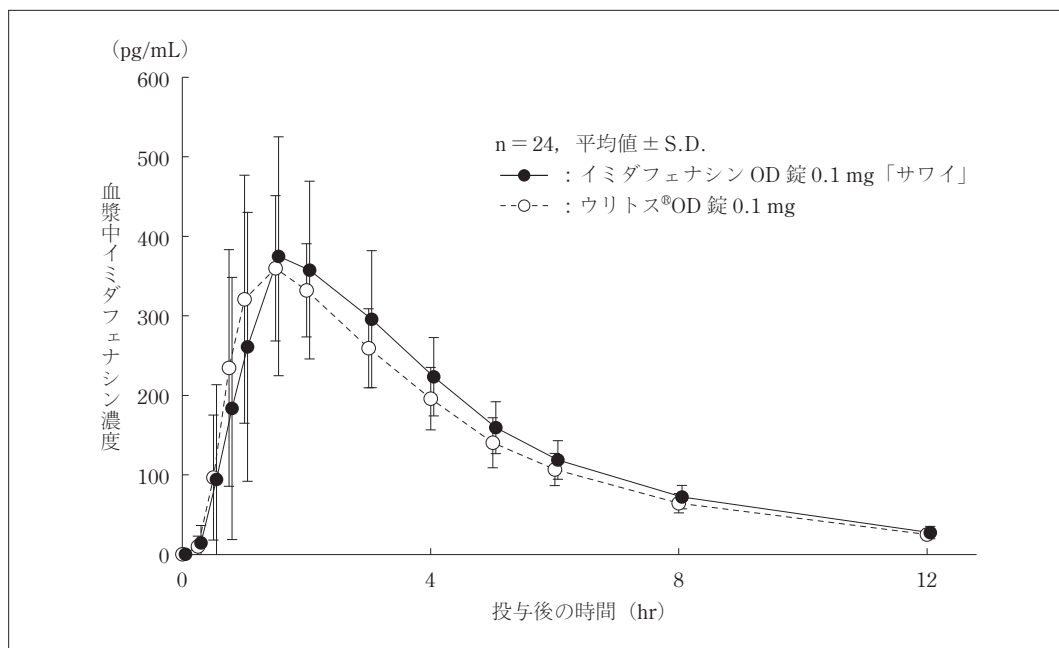


図3 水なしで服用する試験の血漿中イミダフェナシン濃度

2. 水なしで服用する試験

1) 対象被験者

被験者24例を薬物動態および安全性の評価対象とした。被験者の年齢は20~43歳(平均25.3歳), 体重は50.8~76.4 kg(平均63.4 kg), BMIは18.5~23.3(平均21.0)であった。

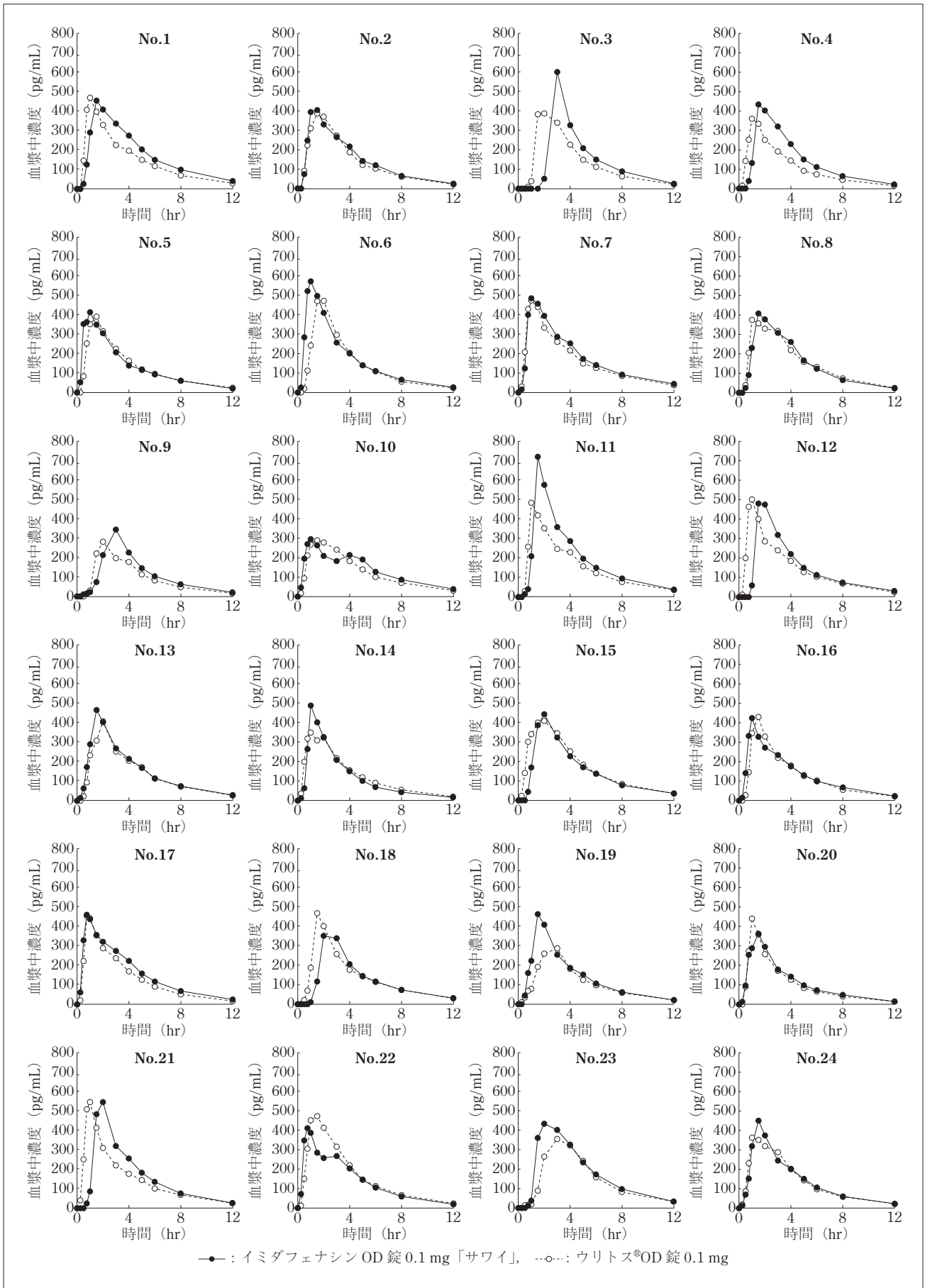
2) 血漿中薬物濃度

平均血漿中濃度推移を図3, 各被験者の血漿中濃

度推移を図4, 薬物動態パラメータおよび参考パラメータの分散分析結果を表8に示した。血漿中イミダフェナシン濃度は製剤間で類似した推移を示したが, AUC_∞において製剤間に有意差が認められた。その他のパラメータにおいて有意差は認められなかった。

3) 生物学的同等性

血漿中イミダフェナシン濃度より求めたAUC_tお



—●—: イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」, ---○---: ウリトス®OD 錠 0.1 mg

図4 水なしで服用する試験の各被験者の血漿中イミダフェナシン濃度

表8 水なしで服用する試験の薬物動態パラメータ (n=24, 平均値±S.D.)

	AUC _t (pg・hr/mL)	AUC _∞ (pg・hr/mL)	Cmax (pg/mL)	tmax (hr)	kel (hr ⁻¹)	T _{1/2} (hr)	MRT (hr)	AUC _t /AUC _∞ (%)
イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」	1753.6 ±253.2	1867.8 ±282.8	454.5 ±89.2	1.52 ±0.59	0.248 ±0.027	2.83 ±0.33	3.98 ±0.39	94.0 ±1.8
ウリトス [®] OD 錠 0.1 mg	1632.3 ±228.2	1736.4 ±254.1	410.5 ±70.6	1.49 ±0.62	0.245 ±0.023	2.85 ±0.29	3.86 ±0.31	94.1 ±1.5
分散分析結果*	—	p=0.0027	—	p=0.8228	p=0.5357	—	p=0.0788	—

*: p<0.05 で有意差あり

表9 水なしで服用する試験の生物学的同等性解析結果

	AUC _t	Cmax
対数値の平均値の差の90%信頼区間*	log(1.03)~log(1.12)	log(1.03)~log(1.18)
対数値の平均値の差	log(1.07)	log(1.10)

*: log(0.80)~log(1.25) の範囲にあるとき、生物学的に同等と判定する

よび Cmax の対数値の平均値の差の90%信頼区間は、log(1.03)~log(1.12) および log(1.03)~log(1.18) であり、いずれも log(0.80)~log(1.25) の範囲内であった。したがって、イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」とウリトス[®] OD 錠 0.1 mg は、水なしで服用する試験において生物学的に同等であると判定された (表9)。

4) 安全性

本治験において、有害事象は認められなかった。

考 察

ジェネリック医薬品のイミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」について、先発医薬品であるウリトス[®] OD 錠 0.1 mg との生物学的同等性を検証するため、日本人健康成人男性を対象に2剤2期のクロスオーバー試験を行った。本剤は口腔内崩壊錠であるため、「水なしで服用する試験」と「水で服用する試験」を行い、血漿中イミダフェナシン濃度から求めたパラメータを用いて生物学的同等性を評価した。

その結果、いずれの試験においても両剤の AUC_t および Cmax の対数値の平均値の差の90%信頼区間は log(0.80)~log(1.25) の範囲内であった。また、参考パラメータの分散分析において、「水で服用する試験」ではいずれのパラメータでも製剤間に有意差は認められなかった。一方、「水な

しで服用する試験」では AUC_∞ の製剤間に有意差が認められたが、これは検出力が非常に高かったことによりわずかな差が有意な差として検出されたもので、両剤の有効性および安全性に差を生じさせるものではないと考えられた。その他の参考パラメータでは、製剤間に有意差は認められなかった。以上のことから、イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」とウリトス[®] OD 錠 0.1 mg は、生物学的に同等であると判定された。また、本治験において有害事象は認められず、被験者の安全性に問題はなかった。

以上の試験結果より、イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」とウリトス[®] OD 錠 0.1 mg の生物学的同等性が確認されたことから、両剤の治療学的同等性は保証されるものと考えられる。

利益相反

イミダフェナシン OD 錠 0.1 mg 「サワイ」の生物学的同等性試験は、沢井製薬株式会社からの委託により契約を締結して、医療法人相生会 にしくもと病院で実施した。

参考文献

- 1) 後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン [平成9年12月22日医薬審第487号 (平成13年5月31日医薬審786号, 平成18年11月24日薬食審査発第1124004号および平成24年2月29日薬食審査発0229第10号にて一部改正)]